

European Living in Japan

日本で活躍するヨーロッパ人

How a Film Magazine's French Editor Turned Into a Multi-talented Japanese Media Star

映画誌編集者から マルチタレントへ変身を 遂げたフランス人

質素なセーターを着ていてもダンディ。複数の言語を操る才人であるばかりか、コミュニケーション能力にも長けていて、日本のマスコミではすっかりおなじみ。「ハローキティ」と同じ1974年11月1日生まれがご自慢のフランス人フローラン・ダバディ氏は、元サッカー日本代表監督フィリップ・トルシエの通訳として一躍日本で有名になった。



休暇を楽しむダバディ氏
(群馬県の温泉にて)

幼いころから外国に触れる

ダバディ氏の名刺とホームページには、彼の大好きな映画「スター・ウォーズ/帝国の逆襲」のキャラクターに扮した本人の写真が載っている。彼は悪の帝国軍と戦うジェダイ騎士というわけだ。「両親は2人とも理想主義者で、人道的な活動に取り組んできました」。事実、母親は闘うジャーナリストとして、フランスがアルジェリア戦争にどう関わったかなどを明かしてきた。映画脚本家として有名な父ジャン・ルー・ダバディは、カトリーヌ・ドヌーヴやロミー・シュナイダーといったスター女優が出演する映画や、フランソワ・トリュフォー監督作品の脚本も手がけている。

パリでの子ども時代、両親から息子への誕生日プレゼントはオモチャであつたためしがなく、常に旅行や文化活動への参加など人間的成長を促す新

しい体験だった。

こうした教育方針のおかげで、ダバディ氏は幼いころから多くの国を訪れる機会に恵まれた。カリフォルニア大学ロサンゼルス校への留学も経験したが、ロサンゼルスにはそう長くはいなかった。「ただ遊んでいるだけの金持ちのドラ息子になるのは嫌だったから」だ。「パリに戻って、学んでいる人が比較的少ない言語を習得してみようと思い、国立東洋言語・文化研究院 (INALCO) で韓国語を修得することにしました」。入学後日本語と出会い、直ちに魅了され、それも学ぶことにした。そして、間もなく留学生として初めて日本を訪れる機会を得た。奨学金の関係で行き先は当初予定していた東京ではなく静岡になったが、「結果的に日本語を話さざるを得ない状況になったので、良かったです」と振り返る。

パリに戻ったダバディ氏は、創刊したての映画誌『プレミア』の日本語版編集の仕事を担当された。日本に戻るチャンスということもあり、喜んで引き受けた。しかし、再来日からわずか1カ月後の1998年10月、ひょんな偶然によって人生が大きく変わる事となる。

幸運な出会い

「ある日、東京駅で電車を待っていたら、トルシエ監督に似た背の高い男性を

見かけたんです。もしかして本人ですかと訊ねてみたら、その通りでした。会話ははずみ、その後喫茶店に移動してさらに話を続けました。監督とは最初からすごく気が合いました」とダバディ氏。それにしても、1週間後に監督から電話で自分のアシスタントにならないかと言われた時はさすがに驚いた。すでに『プレミア』の仕事を始めていたので、申し出は断った。しかし、その1週間後にはピッチに立ち、トレーニング中のトルシエ監督の通訳を務めていた。「一度様子を見に来ないかと誘われたので、行ってみたんですが、その場でウェアを渡され、今日は通訳がないから手伝ってくれ、と頼まれたんです」。

トルシエ監督はなんとかダバディ氏を自分のアシスタントとして雇うよう日本サッカー協会に要請、最終的にその希望は受け入れられた。一方、当初は映画誌の編集も続けていたダバディ氏にとっては、困難で波乱に富んだ日々の幕開けとなった。だが、トルシエ監督の下で過ごしたこの時期について語る時、ダバディ氏の表情は一段と明るくなる。「監督は決して目的のために手段を選ばない人間ではありません。やり手だけれどとても純粋で、とにかくサッカーが好きなのです」。ダバディ氏は、監督と彼の間では意見があまりにも一致するので通訳の仕事はすいぶん楽だったと言う。「最終的には、まるで監督が自分に



大分大学で講演を行うダバディ氏(右)



ダバディ氏の母親(左から3人目)とトルシエ監督夫妻と一緒に監督の好きな骨董を求めて

※ 両頁の写真は、FLORENT DABADIE OFFICE提供

乗り移ったようでした。ある時など、試合後のインタビューで、監督よりも私が先に答え始めてしまい、記者に『待ってください、トルシエ監督はまだ一言も話してませんよ』と言われたこともありました」。

それはまた、日本サッカーにとっても激動の時代でもあった。「私たちがあちこちで敵を作っているのは知っていましたし、時にはスポーツへの関心が低すぎるとテレビ局に詰め寄ったり、コメンテーターがサッカーのことを知らなすぎると非難したり、場合によってはスポンサーさえも批判したりして、まるで映画『アンタッチャブル』の主人公になったような気分でした」。とはいえ、この時期、多くのことを達成できたのも事実で、2002年FIFAワールドカップでの日本代表の活躍は素晴らしかった、とダバディ氏は言う。

では、日仏通訳者からテレビキャスター、コメンテーター、そしてモデルへの転身はいかにして行われたのか。ダバディ氏は、トルシエ監督の傍らに立ち続けたことで、日本の人々の間ですっかり顔が知られるようになった、と説明する。「日本代表を離れた後、多くのインタビューの申し込みが舞い込んで来て、語学、映画、スポーツと、いろいろな方面での自分の能力をアピールする機会があった」ためだ。2005年には独立して自分の事務所を設立、現在ではテレビ番組2本、ラジオ番組2本でレギュラーを務め、雑誌連載を4本持つ。



本人の好奇心が好き

人々に注目され、多忙な毎日を送るダバディ氏だが、決してその容貌や活躍ぶりからイメージするようなセレブ

な生活を満喫しているわけではない。実生活のダバディ氏は、東京都心によくある小さなマンションに住み、日本の食生活や文化にもすっかり馴染んでいる。普段の生活とはいえば、午前中はメールをチェックしてから、テレビやラジオ番組の仕事に取りかかる。昼食には日本そばや寿司などを食べることも多い。午後も通常、テレビやラジオの仕事でいっぱい。夕食はたいてい外食で、帰宅後最もクリエイティブな能力を発揮しやすい深夜に雑誌の連載記事を執筆する。スポーツはテニス。名刺のイメージとは異なり、武術にはあまり興味がない。

「徐々にフランスに帰っても、以前と何も変わっていません。喫茶店では前と同じボーイが注文を取りにきて、パン屋では同じ人がパンを売っている。それに対し、東京を3カ月も離れていると、新しい建物が建ったり、近所の人々の顔ぶれも変わっていたりして、いない間にたくさん新しいことが起きています」。同国人に対するダバディ氏の評価は手厳しい。「フランス人は甘やかされているからなのか、好奇心が足りない。金儲けよりも仕事を減らし、休暇を多く取ることに関心を持っている」。フランスという国についても「EUに加盟しているおかげで、フランスは前進せざるを得ない。そうでなければ停滞していたでしょう」と言う。

ダバディ氏本人は明らかに仕事人間だ。「長期休暇なんて取ったら絶対に退屈する」。それに、日本での仕事や生活が気に入っている。新しい考えを提案すると、日本では興味や関心を示す人が多くて、彼はそのエネルギーが好きなのだそうだ。

これほどの成功を収めてきたダバ

ディ氏の次の目標は——「正直言って映画を撮ってみたい」。大好きなのは、ウディ・アレンやナンニ・モレッティの作品。「こういった微妙なニュアンスのユーモアというのは日本にはそうありません。日本には、英国のモンティ・パイソンやフランスのギニョルのような風刺の効いた作品が成功するニッチ(すき間)がある、と見ています」。政治やスポーツを扱った風刺番組の市場は十分存在している、とダバディ氏は確信しているのだ。

現在32歳、仕事で成功を収め、容貌もいい、となると周囲の女性が放っておかないはずだ。しかし、彼は、自分の親のように知識が豊富で、経験も豊か、エネルギーで言葉遣いは繊細、ユーモアが分かり、美的感覚も優れている人が現れるのを待っていると言う。「完全主義、理想主義なのは承知。でも、いつか必ず僕のプリンセスと出会う、と信じたい」。親譲りの理想主義の血がここでも騒ぐのだろう。 



Florent DABADIE
フローラン・ダバディ
マルチタレント

1974年、パリ生まれ。アメリカUCLAに留学後、パリ東洋言語・文化研究学院日・韓学科に入学、97年に卒業。98年、映画誌『プレミア』のエディターとして来日。同時にサッカー日本代表監督の通訳に抜擢され、パーソナルアシスタントに。現在は、雑誌のコラムニストを務めるほか、テレビのキャスター、解説者、俳優、モデルとしても活動を広げる。

